

狭山市埋蔵文化財調査報告書 20

坂上遺跡第1次調査
城山砦跡第1・2・3次調査

個人住宅建設・学術研究に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2014

狭山市教育委員会

狭山市埋蔵文化財調査報告書 20

さかうえい せきだい じちようさ
坂上遺跡第1次調査

しろやまとりであとだい じちようさ
城山砦跡第1・2・3次調査

個人住宅建設・学術研究に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2014

狭山市教育委員会

序

狭山市の遺跡は、市域中央を貫流する入間川に沿う形で、左右兩岸の台地上に多く所在します。これらの遺跡は、当時の人々の生活を知る上で大変貴重なものであり、狭山市内の埋蔵文化財包蔵地内で開発・事業が行われる場合、事前に発掘調査が実施され、記録・保存されます。

本報告書は、平成 22 年度に個人住宅の建設に伴って行われた、奈良・平安時代の遺跡の発掘調査と、平成 18 年度から平成 23 年度にかけて 3 度に亘って行われた、中世城館跡の学術調査と、史跡の保存を目的とした調査の成果報告書です。

この成果が、当地域の研究と埋蔵文化財発掘調査に対する理解を深めるとともに、市民の皆様の生涯学習に資するものになれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査においてご理解いただいた関係各氏、また、献身的に調査に従事し、報告書刊行までご協力いただいた協力員の方々に厚く御礼申し上げます。

平成 26 年 2 月 3 日

狭山市教育委員会
教育長 松本 晴夫

例 言

- 1 本書は狭山市大字下奥富地内所在の坂上遺跡第1次調査及び狭山市柏原地内所在の城山砦跡第1・2・3次調査の報告書である。
- 2 本書で報告する、坂上遺跡は、個人住宅建築に伴う発掘調査であり、城山砦跡は、学術研究、および史跡の保存に関わる発掘調査である。いずれも狭山市教育委員会が発掘調査を実施し、調査費用は国庫・埼玉県費補助事業として行い、国、埼玉県、および狭山市が負担した。
- 3 発掘調査届に対する狭山市の通知番号と調査原因は、以下のとおりである。
坂上遺跡第1次調査：平成23年2月25日付 狭教社発第328号 記録保存調査
城山砦跡第1次調査：平成18年6月8日付 狭教社発第61号 学術研究
城山砦跡第2次調査：平成19年3月14日 狭教社発第278号 学術研究
城山砦跡第3次調査：平成23年2月14日 狭教社発第311号 保存目的調査
- 4 発掘調査期間及び整理・報告書作成期間・担当者は、以下のとおりである。
坂上遺跡第1次調査：平成23年2月25日～平成23年3月18日 石塚和則・三ツ木康介
城山砦跡第1次調査：平成18年6月13日～平成19年2月7日 石塚和則・安井智幸・(工藤匡史)
城山砦跡第2次調査：平成19年3月14日～平成19年3月16日 石塚和則・安井智幸
城山砦跡第3次調査：平成23年2月14日～平成23年2月28日 石塚和則・三ツ木康介
整理・報告書作成：平成25年7月13日～平成26年1月31日 安井智幸
- 5 図版の作成と出土品の整理は安井が担当し、補助として名雲教子、橋本弓子、古川恵子が参加した。
- 6 本書の執筆は、第Ⅱ章の2を三ツ木が担当し、他は安井が担当した。
- 7 本書の編集は、狭山市教育委員会が行った。
- 8 下記の諸氏並びに諸機関から御教示・御協力を賜った。厚く感謝の意を表する（敬称略、五十音順）。
加藤恭朗 田中広明 根本 靖 公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 埼玉県教育局市町村支
援部生涯学習文化財課

凡 例

- 1 挿図の縮尺は、坂上遺跡調査区全測図・遺構図は1/60、城山砦跡全測図は1/2,000、断面図は長さに応じて1/60、1/200、1/400、各遺物実測図は1/3とした。また、各挿図にスケールを付した。
- 2 遺構平面図の方位は、座標北を、遺構断面図の水糸レベルは、海拔高を示す。
- 3 遺構の表記記号は、住居跡：SJ、溝跡：SDとした。
- 4 出土遺物の位置を示すために、住居跡を主軸方位の線と、その中心点で直角に交わる線を基準に4分割し、カマドの右側に当たる区画を第1区、以下時計回りに2・3・4区と表記した。
- 5 遺物観察表の表記は、口径、底径、内底径、器高はcmを単位とし、()内の数値は推定値・現存値である。色調の記載は、農林省農林水産技術会議事務局編集『新版 標準土色帳』に準拠した。胎土は肉眼で観察できるものを示し、焼成は良好・普通・不良の3段階に分けた。残存率は図示した器形に対し5%単位で示したが、20%以下で特徴を示し難いものは「破片」として処理した。
- 6 本報告書に掲載した出土品は、狭山市教育委員会で保管している。

目次

序	
例言	
凡例	
目次	
挿図目次	
図版目次	
I 調査の概要	
1 発掘調査に至る経過	1
2 発掘調査の組織	2
II 遺跡の立地と環境	
1 地理的環境	3
2 歴史的環境	6
III 坂上遺跡第1次調査	
1 遺跡の概要	8
2 発掘調査の経過	8
3 検出遺構と出土遺物	9
IV 城山砦跡第1・2・3次調査	
1 遺跡の概要	17
2 発掘調査の経過	18
3 検出遺構と出土遺物	19
V 結語	
坂上遺跡第1号住居跡について	23

挿図目次

第 1 図 狭山市遺跡分布図	・ ・ ・ ・ ・ 4	第 9 図 城山砦跡第 1・2・3 次調査区全測図	
第 2 図 坂上遺跡第 1 次調査区位置図	・ ・ ・ 8		・ ・ ・ 19
第 3 図 坂上遺跡第 1 次調査区全測図	・ ・ ・ 9	第 10 図 本曲輪北内堀・二ノ曲輪西堀土層図	
第 4 図 第 1 号住居跡	・ ・ ・ ・ ・ 11		・ ・ ・ 20
第 5 図 第 1 号住居跡出土遺物 (1)	・ ・ ・ 13	第 11 図 第 1 号トレンチ出土遺物	・ ・ ・ 21
第 6 図 第 1 号住居跡出土遺物 (2)	・ ・ ・ 14	第 12 図 第 3・4 号トレンチ出土遺物	・ ・ ・ 21
第 7 図 第 1 号住居跡出土遺物 (3)	・ ・ ・ 15	第 13 図 第 10 号トレンチ出土遺物	・ ・ ・ 22
第 8 図 城山砦跡第 1・2・3 次調査区位置図		第 14 図 揚榑木遺跡出土墨書土器「㊦」	・ ・ ・ 24
	・ ・ ・ 17		

写真図版目次

図版 1 坂上遺跡第 1 次調査調査区全景 ・ 同小学生対象の見学会の様子	図版 8 城山砦跡第 1 次調査第 1・2 号トレンチ ・ 同第 4 号トレンチ外土塁側・内土塁側
図版 2 坂上遺跡第 1 号住居跡全景・遺物出土状況	図版 9 城山砦跡第 2 次調査第 5 号トレンチ ・ 同第 6・7 号トレンチ
図版 3 坂上遺跡第 1 号住居跡カマド全景 ・ 同遺物出土状況	図版 10 城山砦跡第 3 次調査第 9 号トレンチ ・ 同第 10 号トレンチ南側から・北側から
図版 4 坂上遺跡第 1 号住居跡出土遺物 (1)	図版 11 城山砦跡第 1～4 号トレンチ出土遺物
図版 5 坂上遺跡第 1 号住居跡出土遺物 (2)	図版 12 城山砦跡第 3～10 号トレンチ出土遺物
図版 6 坂上遺跡第 1 号住居跡出土遺物 (3)	
図版 7 坂上遺跡第 1 号住居跡出土遺物 (4)	

I 調査の概要

1 発掘調査に至る経過

(坂上遺跡第1次)

平成23年1月14日に、狭山市大字下奥富字坂上492-1の土地について、事業者より、文化財保護法第93条第1項の規定による埋蔵文化財発掘届が提出された。これを受け、市教委が平成23年2月4日に確認調査を実施したところ、奈良・平安時代の竪穴住居跡1軒が検出された。

この結果を基に、埼玉県教育委員会から、検出された遺構部分にかかる100㎡について、埋蔵文化財発掘調査の指示通知(例言に番号等記載)が出された。同事業は個人住宅建設事業であるため、狭山市教育委員会が主体となって平成22年度国庫・埼玉県費補助事業として、平成23年2月25日から発掘調査を開始した。

(城山砦跡第1次)

平成17年6月3日に埼玉県教育局生涯学習部生涯学習文化財課職員が狭山市指定史跡城山砦跡を見学し、「土塁の保存状態が非常に良好で、県内でも屈指の保存状態である」ことを示したため、狭山市でも当該史跡を県指定文化財に指定の事務手続きを開始した。平成17年度の狭山市第1・2回文化財保護審議会でも県指定申請について議論され、県生涯学習文化財課とともに指定に向けて事務手続きを進めた。その結果、平成18年1月10日に県文化財保護審議会委員による県指定申請事前見学会が当該地で行われたが、遺構の歴史・時代的な位置付けを示す客観的な考古・文献資料の不足と、名称の問題(砦にするか、城にするか)が指摘され、県指定文化財指定については保留となった。その際の「周辺の風致を含めた遺構の遺存度の高さから高い評価を受けてきた城跡ではあるが文献資料が不足しているため来歴が明確ではない。縄張り研究と歴史的背景から扇谷上杉氏による築城後、後北条氏による改修が行われたとされてきたものの、これらを考古学的に裏付ける学術調査が必要」との県文化財保護審議会の見解を受けて、①年代を明らかにする、②構造・性格・特徴を位置付ける、の2点を主たる目的として、第1次調査を平成18年6月13日から開始した。

(城山砦跡第2次)

第2次調査も第1次調査と同じ目的で、平成19年3月14日から開始した。

(城山砦跡第3次)

平成18年度に、当該遺構内で場所を変更しつつ、2回に分けて学術調査を実施したものの(第1・2次調査)、年代を決定する資料は検出されなかった。また、同遺構内で樹木の立ち枯れが頻発しており、伐採等の計画を策定し、同遺構を保護しなければならない状況にあった。このため、平成22年度以降の保護計画策定の基礎資料を得るため、同遺構の構造・構築時期などの内容確認を目的として、平成23年2月14日から発掘調査を開始した。

遺跡名	所在地	調査面積	時代
坂上遺跡第1次調査 (県遺跡番号 22-029)	狭山市大字下奥富 字坂上 492-1	100 m ²	奈良・平安
城山砦跡第1次調査 (県遺跡番号 22-014)	狭山市柏原 2346-2	3,489 m ²	中世
城山砦跡第2次調査 (県遺跡番号 22-014)	狭山市柏原 2376	1,391 m ²	中世
城山砦跡第3次調査 (県遺跡番号 22-014)	狭山市柏原 2346-2	3,489 m ²	中世

2 発掘調査の組織

1) 発掘調査（平成 18・19・22・23 年度）

狭山市教育委員会（主体者）	教育長	門倉節明（18・19） 松本晴夫（22・23）
	生涯学習部 部長	松本晴夫（18・19） 向野康雄（22・23）
（担当課）	社会教育課 課長	利根川忠男（18・19） 白倉 孝（22・23）
	文化財担当 主幹	末吉 隆（18）
	主査	半貫芳男（19・22・23） 石塚和則
	主事	北山誠也（22・23） 安井智幸（18・19） 三ツ木康介（22・23）
	（調査担当）	石塚和則・安井智幸（18・19） 石塚和則・三ツ木康介（22・23）

2) 報告書作成（平成 25 年度）

狭山市教育委員会（主体者）	教育長	松本晴夫
	生涯学習部 部長	栗原秀明
（担当課）	社会教育課 課長	北田奈緒美
	文化財担当 主査	半貫芳男
	主査	石塚和則
	主任	北山誠也 安井智幸
	（報告書作成担当）	安井智幸

Ⅱ 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

狭山市は、市域中央を貫流する入間川によって分断された、入間台地と武蔵野台地の境に立地する。

入間川は外秩父山地を水源とする名栗川と、青梅市に水源を持つ成木川が加治丘陵で合流して形成された河川で、比企丘陵入間台地を開析する都幾川・槻川・高麗川・越辺川・小畦川を東へ荒川に接続し、市域から始まり荒川接続点周辺にいたる地域までの巨大な沖積平野を形成する。

沖積平野に繋がる、市域の最も低い沖積面の両側には、河岸段丘が見られる。段丘の内最も低い面は立川面、最も高い面は下末吉面であり、その中間に武蔵野面が存在する。

市域の最高点は、稲荷山公園南方の航空自衛隊基地内にあり、海拔高は約 100m である。高度は北東に行くに従って下がり、青柳北方の川越市と隣接する地点で最も低くなり、海拔高は約 29m になる。

市域の地下構造は、下末吉・武蔵野・立川のそれぞれの名を冠した礫層の上にさらに各名のローム層が乗る形になっている。下末吉・武蔵野ローム層は立川ローム層によって覆われているため、通常は露出していない。

下末吉ローム層は、下末吉面から武蔵野面へ遷移する場所である、鶴ノ木周辺の崖地で観察が可能である。黄褐色から橙茶色の色調で、粘土化の進んだ柔らかいロームである。厚さは 3～4m で、一般的には輝石と角閃石および木曾御岳火山から噴出した Pm-1 が含まれる層であるが、市域では現在のところ確認されていない。

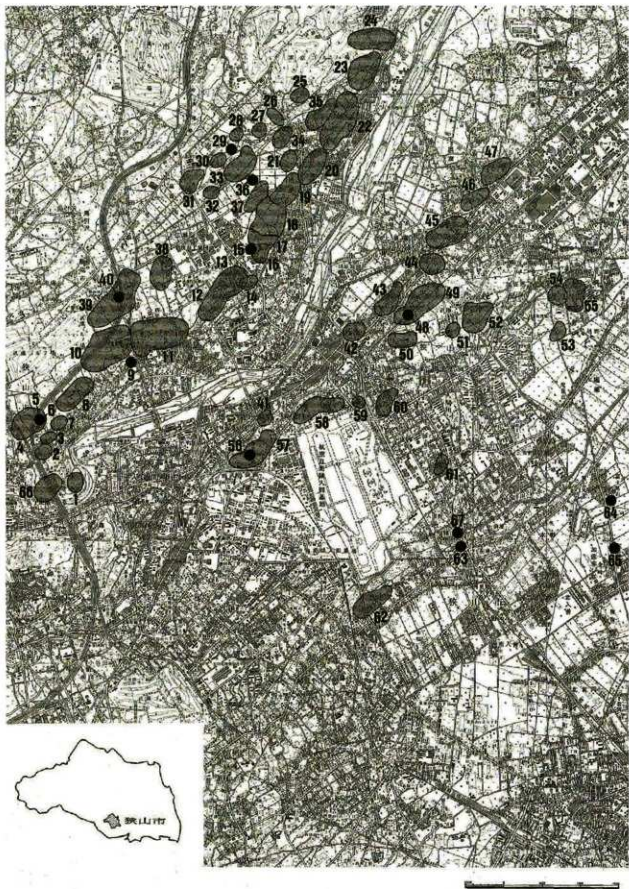
武蔵野ローム層は、下末吉面または武蔵野面から立川面に遷移する場所で観察される。乾燥し易く暗茶褐色を呈し、最下部より 10～20cm 位に箱根火山から噴出した火山灰層である、東京軽石層が存在する。輝石を多く含み、層上部に行くに従ってカンラン石が増える。

立川ローム層は市域全体を 1～2m 程度覆う層で、乾燥すると暗赤褐色～暗黄褐色を呈する。カンラン石・輝石を含むこの層の上部に遺構が存在するため、市域の発掘調査における遺構確認面の大多数は立川ローム層に設定されている。

市域の北側となる左岸は武蔵野・立川面の二段、南側となる右岸は、これに下末吉面を加えた三段の河岸段丘を形成している。奈良・平安時代の市内遺跡は市域の河川の中でも入間川を中心にして分布するものが多い。

入間川左岸は、武蔵野台地の一部である入間台地に属し、北から宮ノ越遺跡、城ノ越遺跡、御所の内遺跡、小山ノ上遺跡、鳥ノ上遺跡、富士塚遺跡、森ノ上遺跡と存在し、若干離れて今宿遺跡、上広瀬古墳群、金井上遺跡、宮地遺跡、東八木窯跡群等が連続と帯状に続く。これら一連の遺跡群は時代が下るにつれて下流から上流へと形成されていく傾向がある。

入間川右岸は、武蔵野台地に属する旧多摩川の隆起扇状地で、北から稲荷上遺跡、揚楯木遺跡、坂上遺跡、戸張遺跡、中原遺跡、峰遺跡、滝祇園遺跡等が左岸の遺跡群に対峙する形で集落を形成する。これら右岸の遺跡群は地下水脈が深く、湧水地点の周辺に、集中的に集落が形成される傾向がある。



第1图 狭山市遺跡分布图

狭山市内遺跡一覧（括弧内は県遺跡番号）

- | | |
|---------------------------------------|----------------------------------|
| 1 東八木窯跡群 (22049) 奈・平 | 37 上双木遺跡 (22077) 縄 (中・後)、奈・平 |
| 2 八木遺跡 (22068) 縄 (前・中)、奈・平 | 38 上広瀬西久保遺跡 (22073) 奈・平 |
| 3 八木北遺跡 (22021) 奈・平 | 39 西久保遺跡 (22069) 先、縄 (草)、奈・平 |
| 4 八木上遺跡 (22022) 縄 (前・中)、奈・平 | 40 東久保遺跡 (22070) 先 |
| 5 沢口上古墳群 (22020) 古 (後) | 41 上諏訪遺跡 (22086) 縄 (中・後)、奈・平 |
| 6 笹井古墳群 (22019) 古 (後) | 42 滝祇園遺跡 (22066) 縄 (草～後)、古、奈・平 |
| 7 沢口遺跡 (22080) 縄 (早～中)、古、奈・平 | 43 峰遺跡 (22024) 縄 (中・後)、奈・平 |
| 8 宮地遺跡 (22018) 縄 (中)、奈・平 | 44 戸張遺跡 (22026) 縄 (前・中)、奈・平 |
| 9 金井遺跡 (22071) 中 | 45 揚榎木遺跡 (22027) 縄 (前・中)、奈・平 |
| 10 金井上遺跡 (22023) 縄 (草・前)、奈・平、中 | 46 坂上遺跡 (22029) 縄 (中)、奈・平 |
| 11 上広瀬上ノ原遺跡 (22005) 縄 (草)、奈・平 | 47 稲荷上遺跡 (22032) 縄 (前・中)、奈・平 |
| 12 霞ヶ丘遺跡 (22004) 縄 (中)、奈・平 | 48 上中原遺跡 (22025) 先 |
| 13 今宿遺跡 (22002) 縄 (早～中)、奈・平 | 49 中原遺跡 (22025) 縄 (早～後)、奈・平 |
| 14 上広瀬古墳群 (22001) 古 (後) | 50 沢台遺跡 (22079) 縄 (中)、奈・平 |
| 15 森ノ上西遺跡 (22008) 先 | 51 沢久保遺跡 (22041) 縄 (中) |
| 16 森ノ上遺跡 (22008) 縄 (中・後)、奈・平 | 52 下向沢遺跡 (22042) 縄 (中・後)、奈・平 |
| 17 富士塚遺跡 (22009) 縄 (中)、奈・平 | 53 吉原遺跡 (22067) 縄 (前) |
| 18 鳥ノ上遺跡 (22010) 奈・平 | 54 下向遺跡 (22085) 縄 (前～後) |
| 19 小山ノ上遺跡 (22011) 縄 (中・後)、古～中 | 55 台遺跡 (22084) 縄 (前～後) |
| 20 御所の内遺跡 (22012) 奈・平 | 56 稲荷山公園古墳群 (22052) 古 (後) |
| 21 英遺跡 (22074) 奈・平、中 | 57 稲荷山公園遺跡 (22051) 縄 (中) |
| 22 城ノ越遺跡 (22013) 縄 (前・中)、奈・平、中 | 58 石無坂遺跡 (22083) 縄 (中) 奈・平 |
| 23 宮ノ越遺跡 (22016) 縄 (前・中)、奈・平 | 59 富士見西遺跡 (22082) 縄 (中)、奈・平 |
| 24 字尻遺跡 (22075) 縄 (前～後)、奈・平 | 60 富士見北遺跡 (22072) 縄 (前・中)、奈・平 |
| 25 丸山遺跡 (22037) 縄 (早・前～後) 奈・平 | 61 富士見南遺跡 (22081) 縄 (中) |
| 26 金井林遺跡 (22035) 縄 (前～後) | 62 町屋道遺跡 (22088) 縄 (前～後)、奈・平 |
| 27 鶴田遺跡 (22044) 縄 (前・中) | 63 七曲井 (22046) 中 |
| 28 上ノ原東遺跡 (22065) 奈・平 | 64 堀兼之井 (22047) 中 |
| 29 上ノ原西遺跡 (22063) 縄 (中) | 65 八軒家の井 (22076) 中 |
| 30 半貫山遺跡 (22061) 中 | 66 八木前遺跡 (22087) 縄 (前・後) |
| 31 稲荷山遺跡 (22058) 縄 (後) | 67 堀難井遺跡 (22089) 中 |
| 32 前山遺跡 (22059) 縄 (中) | |
| 33 高根遺跡 (22062) 縄 (早・中・後) | |
| 34 町久保遺跡 (22034) 縄 (中)、奈・平、中 | |
| 35 宮原遺跡 (22017) 縄 (前～後) | |
| 36 下双木遺跡 (22078) 縄 (草) | |

2 歴史的環境

先土器時代の遺跡としては、平成2年度から平成3年度にかけて（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団が首都圏中央連絡自動車道建設に伴って実施した西久保遺跡（39）発掘調査において、先土器時代の石器製作跡が多数発見され、本市における当該期的一端が明らかとなった。狭山市遺跡調査会でも、平成6年度に同遺跡の発掘調査を行っており、武蔵野台地第4層下部の良好な資料を得ている。また、宮地遺跡（8）では細石刃、細石核が表採されている（城近他1972）。

縄文時代の遺跡は、大略草創期から後期後半までが確認されている。概観すると、前期黒浜期に集落の明確化、遺跡数の増加等、大きな動きが認められるが、数的には中期中葉から後葉のものが大勢を占めており、この時期偏差が市内の縄文遺跡を特徴づけている。過去の調査事例もこの時期に集中する。

市内遺跡は、表面採集資料による時期決定も含めてであるが、縄文時代中期には遺跡数が39箇所と急増し市内遺跡全体の60%を超え、遺跡数の増加、集落規模の拡大が顕著となる。しかしながら、中期終末から後期初頭では、周辺地域にも認められるように集落規模は急速に縮小する。入間川左岸においては、森ノ上遺跡（16）の他、宮地遺跡、字尻遺跡（24）、右岸では揚楯木遺跡（45）等、中期末から後期初頭の柄鏡形住居跡が数軒単位で検出されるにとどまり、市内各地で集落の縮小、住居軒数の急激な減少が看取できる。柄鏡形住居跡は、周辺の入間市・飯能市・日高市でも多くの検出例があり、県内でも入間地方は本種遺構の分布密度が濃いことで知られている。ただし、森ノ上遺跡や字尻遺跡のように当該期のみ限定された集落は稀有な存在と言えよう。なお、入間川左岸に立地する今宿遺跡（13）では、中期末の張出部を持たない径3m前後の小型住居跡が確認されている。本種住居跡は、日高市宿東遺跡でも検出例があり、系統や柄鏡形住居跡との共存関係等、興味深い問題が提起されている（渡辺1998）。

縄文時代晩期から弥生時代にかけての遺構・遺物の確認例は非常に少なく、森ノ上遺跡で土壌中より弥生時代後期から古墳時代前期と考えられる土器が一点報告されているのみである（安井2005）。

古墳時代の遺跡は、沢口上古墳群（5）、笹井古墳群（6）、上広瀬古墳群（14）、稲荷山公園古墳群（56）と滝紙園遺跡（42）が所在する。現在までに調査が実施されたのは笹井古墳群、上広瀬古墳群で、7世紀後半のものと考えられる。笹井古墳群は石室の構造が特異なため、奈良時代以降の墳墓の可能性もある。当該期の集落遺跡には滝紙園遺跡があり、鬼高期に近い時代の土器器裏や坏が出土している（小沢他1983）。

奈良・平安時代の集落は、入間川左岸に帯状に23遺跡あり、右岸は久保・不老川流域のものを含めて14遺跡存在し、住居跡や掘立柱建物跡等の遺構群が検出されている。これら遺構群は、出土遺物を基に時代推定が行われ、8世紀初頭から10世紀末までの間、1世紀を四半期に分割した大略12期に分類して報告されている。市域の集落は、高麗郡が建郡された霊亀2年（716年）よりやや時代の下った8世紀中頃から形成され、その後9世紀第2四半期ごろにピークを迎えた後、次第に数を減らしていく傾向にある。

8世紀第1・2四半期に、入間川兩岸にある宮ノ越遺跡（23）、森ノ上遺跡、小山ノ上遺跡（19）、揚楯木遺跡が形成され始めているが、他期に比べて検出されている遺構・遺物数が少ないため不明な点が多い。指標になっているのは須恵器坏で、特に底部の調整技法が観察できる物の内、回転糸切離し後に丁寧に底部前面～体部下がへうで調整された、底径と口径の差があまり無く、器高が低いものが当該期に位置づ

けられている。他期の須恵器環に比べて口径が大きいものが多く、宮地遺跡第16号住居跡及び宮ノ越遺跡第31・32・56号住居跡出土遺物が主な指標になる。また、それより僅かに時代が下る宮地遺跡第32号住居跡出土遺物も底径の縮小という新要素と並行する点から遷移期の指標としている。なお、これに後続する宮ノ越遺跡第29・58号住居跡出土遺物を酒井清治氏は国分寺創建事業が終わる時期に充てている。

若干時代が下る8世紀後半に分類される遺構は、基準とする須恵器の編年がやや不明瞭なために分類されている遺構・遺物の数量が少ないが、当該期に含まれるものが前後に分類されている可能性も否定できない。指標にしているのは小谷B1号窯（比企郡鳩山町）出土遺物で、口径・底径共に前期より縮小し、底部の周辺回転ヘラ削り・手持ち周辺ヘラ削りが主体となる。これに後続するのは將軍沢2B・2・C・3号窯（比企郡鳩山町）製品だが、市内遺跡における南比企産の個体数が少ないため、直接これに繋げてはいない。

9世紀前半の指標になっているのは、森ノ上遺跡第11・18号住居跡出土遺物で、須恵器環底部の調整が全面ではなく周辺部のみ施されている。器高は前期よりやや高くなり、口径・底径は縮小する傾向にある。縮小傾向は口径より底径においてより顕著に見られるため、底径と口径の差が大きくなる。当該期の遺構は入間川左岸の宮ノ越遺跡、城ノ越遺跡（22）、上広瀬上ノ原遺跡（11）、小山ノ上遺跡、森ノ上遺跡、宮地遺跡に見られる。

9世紀中頃に、入間川左岸では宮ノ越遺跡から城ノ越遺跡、御所の内遺跡（20）、小山ノ上遺跡、森ノ上遺跡、上広瀬上ノ原遺跡、霞ヶ丘遺跡（12）、今宿遺跡、金井上遺跡（10）、宮地遺跡へと連続して集落が形成され、右岸でも稲荷上遺跡（47）、揚榎木遺跡、峰遺跡（43）、戸張遺跡（44）、中原遺跡（49）、滝祇園遺跡と、やはり帯状に集落が形成されている。この頃に見られる人口の増加とそれに伴う東金子窯跡群製品の普及は、承和12年（845年）に開始された国分寺の再建に連動していると考えられ、当該期の市域の集落は、これに関係する人々のものである可能性が指摘されている。

9世紀後半になると住居数は減少するが、入間川兩岸の遺構密度の低下が見られる一方、集落形成範囲の縮小はほとんど見られない。当該期の遺構は、宮ノ越遺跡、城ノ越遺跡、小山ノ上遺跡、今宿遺跡、稲荷上遺跡、揚榎木遺跡、戸張遺跡、中原遺跡に見られ、新久A-1・2窯からD-1・3窯（入間市）の東金子系須恵器が出土する。約半数は還元焰による焼成が行われていない土師質須恵器の環や碗が出現し始め、還元焰によって須恵器を焼成するための諸環境が悪化し、9世紀中ごろまで続いていた生産技術大系の変容が看取できる。

Ⅲ 坂上遺跡第1次調査

1 遺跡の概要

坂上遺跡は、狭山市下奥富に所在する縄文時代中期および奈良・平安時代の集落遺跡で、入間川右岸の台地縁辺部に立地する。遺跡内の標高はおよそ50mで、遺跡北側の沖積地との比高差は7mを測る。

西武新宿線新狭山駅より北西へ直線距離にして0.5km付近に位置し、国道16号線と新狭山駅を結ぶ直線の延長上に遺跡の中心を持つ。北東には稲荷上遺跡、南東には揚榎木遺跡がある。

市史編さんのための調査では、縄文時代中期の土器片および奈良・平安時代の須恵器坏・甕・蓋・壺、土師器甕の破片の散布が確認されている。また、遺跡の南西部に墳丘状の土盛りがあり、古墳との伝承があるものの、狭山市史では、ボーリングステッキによる探査を行った結果、この可能性は低いとしている。



第2図 坂上遺跡第1次調査区位置図

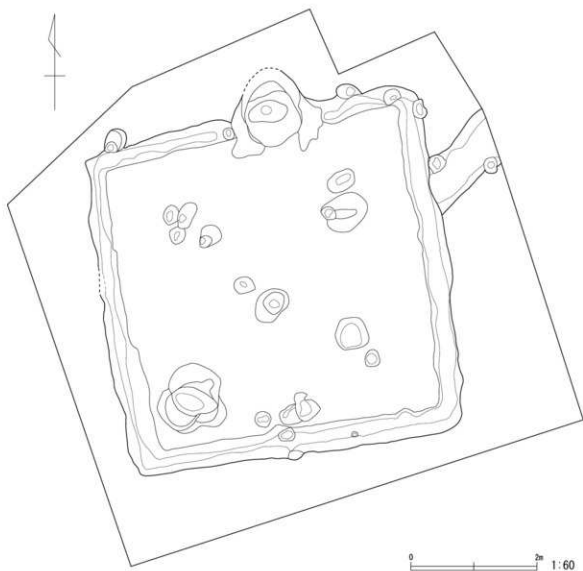
2 発掘調査の経過

本発掘調査は、狭山市教育委員会が平成23年2月25日から平成23年3月18日にかけて実施した。2月25日（金曜日）重機による表土除去を開始し、当日終了。機材搬入。

- 2月28日(月曜日)～3月10日(木曜日)第1号住居跡および第1号溝跡のプランを確認し、掘削。
 3月9日(水曜日)遺構断面図の作成。
 3月10日(木曜日)セクションベルトの除去及び遺構内外の清掃。
 3月11日(金曜日)遺構内の清掃および写真撮影。
 3月14日(月曜日)カマドのセクションベルトを設定し、掘削。
 3月15日(火曜日)カマド断面図の作成及び同セクションベルトの除去。
 3月16日(水曜日)カマドの清掃及び写真撮影、同平面図作成。
 3月18日(金曜日)重機による調査区の埋め戻し及び機材の撤収。現地作業終了。

3 検出遺構と出土遺物

検出された遺構は竪穴住居跡1軒、溝状遺構1条である。出土した遺物は、須恵器環・埴・甕、土師器甕・台付甕、砥石、不明鉄製品、銭貨である。掲載した物以外にも須恵器環・甕片が出土しているが、図化で



第3図 坂上遺跡第1次調査区全測図

きるほどの破片ではなかった。いずれも8世紀第3～4四半期のものと推定される。

住居跡

第1号住居跡(第4～7図)

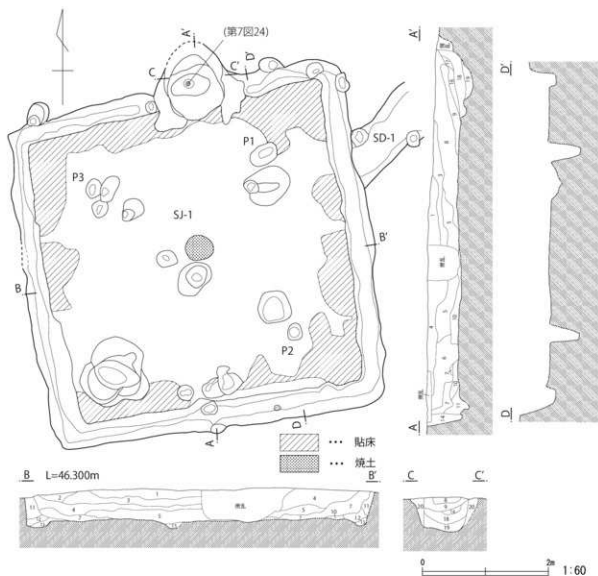
主軸方位はN-11°-Wを指し、南北5.58m×東西5.58mのほぼ正方形を呈する。深さは0.48m程である。住居北側にカマドを検出した。周溝はカマド部分を除いて巡る。西側の壁は崩落したと考えられ、直立に近い形になっていたが、それ以外の壁は床から離れるに従って広がる形で掘られている。

床面は平坦で、住居の四隅付近には貼床が看取できた。貼床以外はやや軟質で、それ以外はよく踏み固められていた。この踏み固めとは別に、中央に、焼き締まったと見られる特に硬いロームが露出する部分があった。周辺に焼土が分布することからも、炉の存在が想定される。

ピットが多数検出されているが、住居に関連すると考えられるのは、図4に示すP1～3で、いずれも他に比べて深く、柱穴と考えられる。P4が想定される部分(住居南西部分)には後代のピットが穿たれており、検出できなかった。

カマドは袖間1.32mを測る。煙道の先端部は攪乱を受けており、検出できなかった。残存する最大長は1.14mである。両袖にあたる部分の灰白色の粘土は状態良く残っていた。中心からは土師器台付甕が伏せた状態で検出された。

出土した遺物のうち、実測可能な29点を掲載し、端的な特徴を出土遺物観察表に示した。1は1区から出土した東金子産の須恵器坏で、底部は全面回転ヘラ削り調整である。ヘラ痕が不明瞭になるほど丁寧に調整されている。また、水含みの指で底部を持った形跡が残っている。底・体部の一部に煤が付着している。2も1区から出土した東金子産の須恵器坏で、底部は全面回転ヘラ削り調整が施されている。外側から削りだし、内側へ削りが進んでいく様子が看取できる。口縁直下を薄く作る、所謂「指先技法」が使用されている。3も1区から出土した東金子産の須恵器坏である。表面の色調は灰(N6/0)であるが、断面にはぶい赤褐(5YR5/3)を呈する。周辺回転ヘラ削り調整が施され、爪先技法が使用されている。4は3区から出土した東金子産の須恵器坏である。底部中心が欠損しているため回転ヘラ削りが底部全面に及ぶとは断言できない。混入する礫はあるものの、胎土は非常に緻密である。爪先技法のような工具痕が有る。5は1区から出土した東金子産の須恵器坏で、底部調整はほぼ全面に亘る回転ヘラ削りである。底部内面には爪先技法のような工具痕が有る。また、口唇部は降灰を受けている。6も1区から出土した須恵器坏で、胎土がザラザラと粉になり易く、持つと粉っぽい印象の器である。炭化物が底部外面に付着していた。爪先技法が使用された後、指でナデ消したような整形痕が有る。7は1-2区に亘って破片が出土した須恵器坏で、暗青灰(10BG4/1)に焼き上げられた堅緻な器である。胎土は多量の白色粒と礫が含まれ、粗い印象を与える。底部と体部の接合部分が明瞭で、これを工具または指の腹でナデ消そうとした形跡が看取できる。体部には正位に「子」字が刻書されている。8は2区から出土した南比企産の須恵器坏で、周辺回転ヘラ削りが施されている。体部は直線的に立ち上がる。9は2区から出土した東金子産の須恵器坏である。爪先技法のような工具痕が底部内面に有る。10は1区から出土した東金子産の須恵器坏で、爪先技法が使用されている。溝の角度が鋭いため、鋭利な工具を使用した痕と考えられる。11は2区から出土した東金子産の須恵器坏で、13に近い胎土を持つ。底部は全面手持ちヘラ削り調整が施されていた可能性が高い。全体的に磨耗が激しく、底部内面を示した図の矢印の方向に、研磨痕らし



- (S-1)
- | | | | |
|----------|--|----------|------------------------------|
| 1 暗茶褐色土 | ローム粒・ブロックを多く含む。やや軟質。 | 11 暗茶褐色土 | ローム粒・ブロックを多く含む。壁の崩落土が。 |
| 2 暗茶褐色土 | ローム粒を多く。焼土粒、炭化物を少し含む。やや軟質。 | 12 黒褐色土 | 第11層よりローム含有が少ない。軟質。 |
| 3 暗茶褐色土 | ローム粒・ブロック、焼土粒、炭化物を多く含む。黄色が強い。硬質。 | 13 暗茶褐色土 | 第11層に類似するが、それよりややロームブロックが多い。 |
| 4 黒褐色土 | 第3層より含有物が少なく、黒色が強い。硬質。 | 14 黒褐色土 | SJ-1より後のピットの層土。ローム粒を多く含む。軟質。 |
| 5 黒褐色土 | 多量の粘土・ロームブロック、焼土粒・ブロックを含む。硬質。色調は灰色に近い。 | 15 黄褐色土 | 削けたローム層。近くに伊があるか。 |
| 6 暗茶褐色土 | ローム粒・ブロックが多く。焼土粒、炭化物も若干混入。軟質。 | 16 暗灰色土 | 第8層に類似。粘土、焼土粒、黒色土を含む。硬質。 |
| 7 黒褐色土 | ローム粒等の含有物少なく、黒色が強い。硬質。 | 17 暗褐色土 | 焼土ブロックを多く含む。第16層と第18層の間層。 |
| 8 暗灰色土 | ブロック状の粘土を多く含む。他は第5層に近い。 | 18 黒褐色土 | 粘性あり。 |
| 9 暗灰色土 | 粘土を主体とする層。粘性強。 | 19 暗褐色土 | 焼土粒・ブロックを多く含む。かなりもろい。 |
| 10 暗黄褐色土 | やや大きいロームブロックを多く含む。 | 20 灰白色土 | この層より遺物が多数検出された。 |
| | | | ローム粒、焼土粒を少量含む灰層。 |
| | | | 粘土層。カマドの両袖部分の構築材。 |

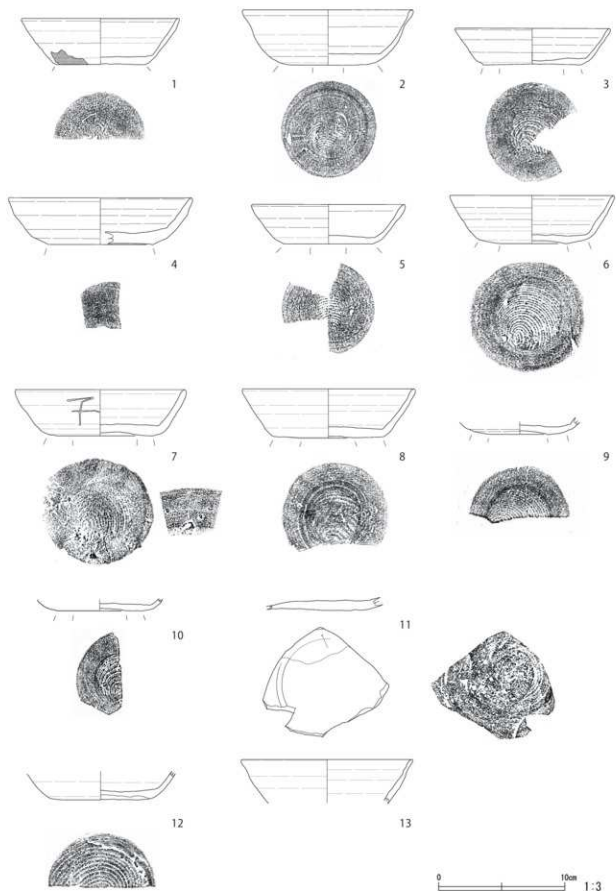
第4図 第1号住居跡

いものが看取できる。12は2区から出土した東金子産の須恵器環で、回転糸切り後、軽く周辺に手持ちへら削りが施されている。底部外面に薄く粘土のバリが付着し、ナデ付けられている。底部内面に水分が多い指で接した痕と、逆に少ない指で接した痕が1箇所ずつ看取できる。底部は糸切り後に付け足されており、付け足された部分の色調は灰(10Y6/1)で、その他はにぶい橙(5YR6/3)になっている。13は3区から出土した粉っぽい器質の東金子産須恵器環で、11に近い胎土を持つ。底部との接合痕で割れた体部の破片で、口径のみ計測が可能であった。14は1区から出土した東金子産の須恵器環の破片である。

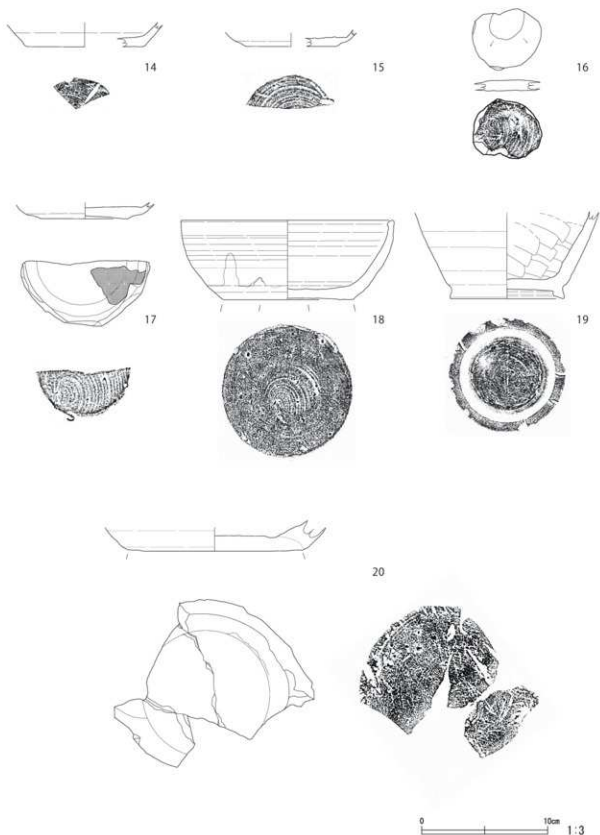
第1号住居跡 出土遺物観察表

No.	器 種	口径	底径	内底径	胴高	残存率	断 片	焼成	色調	特 徴	産地
1	須恵器環	12.5	7.2	8.0	3.7	50%	白・黒色粒	良好	灰白	全面回転ヘラ。一部に保存有。	東金子
2	須恵器環	(13.5)	7.5	8.0	4.4	60%	白色粒、小礫	良好	灰白	全面回転ヘラ。指先技法有。	東金子
3	須恵器環	12.0	7.6	8.0	2.8	50%	白色粒	良好	灰	周辺回転ヘラ。爪先技法有。断面に薄い赤褐色。	東金子
4	須恵器環	(14.2)	(7.6)	(9.4)	3.7	20%	白色粒、小礫	良好	灰	全面回転ヘラか。爪先技法のような工具痕有。	東金子
5	須恵器環	(11.8)	7.3	7.3	3.1	45%	白色粒	良好	灰	周辺回転ヘラ。爪先技法のような工具痕有。	東金子
6	須恵器環	12.8	8.5	8.4	3.8	70%	白・黒色粒、小礫	普通	灰白	周辺回転ヘラ。炭化物が底部に付着。	東金子
7	須恵器環	13.2	8.2	8.9	3.6	80%	白・黒色粒、小礫	良好	暗青灰	周辺回転ヘラ。書文字「子」有。	東金子
8	須恵器環	13.4	8.2	8.6	3.9	65%	白色針状、黒色粒、小礫	普通	灰白	周辺回転ヘラ。	南比企
9	須恵器環	-	8.4	9.0	-	25%	白・黒色粒	良好	にぶい増	底部無調整。底部磨ぎ足し痕有。	東金子
10	須恵器環	-	(7.1)	(7.8)	-	20%	白・黒色粒、小礫	良好	緑灰	周辺回転ヘラ。爪先技法有。	東金子
11	須恵器環	-	8.6	7.0	-	20%	黒色粒、小礫	普通	灰白	13に似た粘土。底部全面持ちちへり調整か。	東金子
12	須恵器環	-	7.6	8.0	-	20%	白色粒	普通	灰白	周辺回転ヘラ。爪先技法のような工具痕有。	東金子
13	須恵器環	13.2	-	-	-	30%	黒色粒、小礫	普通	灰白	底部との接合部分で割れたものか。	東金子
14	須恵器環	-	(8.6)	(8.6)	-	10%	白色粒	良好	灰	底部磨耗している。全面回転ヘラか。	東金子
15	須恵器環	-	(7.8)	-	-	20%	白・黒色粒	良好	灰	全面回転ヘラか。底部外面に棒状の工具爪痕有。	東金子
16	須恵器環	-	-	-	-	10%	白色粒、砂粒	不良	にぶい増	底部無調整。砥石に転用したか。	東金子
17	ロクロ土師器環	-	(6.7)	(9.0)	-	25%	黒色粒	良好	にぶい増	底部無調整。硯に転用している。	東金子
18	須恵器碗	16.8	10.3	9.8	6.3	90%	白色粒、段石	良好	灰	口縁部と底部内面にナデ調整。逆位の粘土垂れ有。	東金子
19	須恵器長頸瓶	-	8.5	7.8	-	15%	白色針状、白色粒、小礫	良好	灰白	底部外面に磨き有るも、削り残し判別は不能。	南比企
20	須恵器壺	-	13.8	10.4	-	10%	白・黒色粒	良好	灰白	体部との接合部分で割れたものか。	東金子
21	土師器壺	23.5	-	-	-	5%	黒雲母	普通	にぶい増	「く」字状口縁。	在地
22	土師器壺	23.8	-	-	-	5%	黒雲母、白色粒	普通	にぶい増	「く」字状口縁。内面一部に保存有。	在地
23	土師器壺	24.0	-	-	-	10%	黒雲母	普通	増	体部が直立架束で、恐らく口縁が輪大径。	在地
24	土師器付冪	13.3	1.1	5.5	17.6	100%	黒雲母、砂、小礫	普通	にぶい増	口縁部に磨ぎ足し痕有。	在地
25	土師器付冪	13.6	-	-	-	10%	黒雲母、白色粒	良好	にぶい増	黒雲母が含まれるか。口縁部は磨らなかに作られている。	在地
26	砥石	長辺長 10.5、短辺長 4.1					石材			粘土質様の石材。焼熱しているか。外面一部に刀子の傷の痕有。	
27	不明鉄製品	短辺長 4.1、短辺幅 2.3					鉄材			穿孔されている。曲りは作成時の意図したものではない可能性が高い。	
28	不明鉄製品	長辺長 4.9、厚さ 0.2					鉄材			元は板状の金属体であり、釘ではない。刀子か。	
29	銭貨	径 2.4、中径 0.6					銅材			北宋の乾寧元寶。篆書体。	

回転ヘラ削り調整が施されている。15は1区から出土した東金子産の須恵器環で、底部の残存が少ないため判断が難しいが、全面回転ヘラ削りが施されている可能性がある。16は2区から出土した東金子産の須恵器環の底部と考えられる破片である。底部の中心から放射状に擦痕が広がっており、砥石に転用された可能性が高い。回転系切り後は無調整である。17は3区から出土したロクロ土師器環である。底部内面の全体に薄い墨痕があり、図に示した部分は特に墨が濃く残る。底部内面は研磨された形跡があり、硯に転用されたと考えられる。18は1区から出土した東金子産須恵器碗である。底部は全面回転ヘラ削り調整が施されている。体部下位まで延長し、削られている。口縁部と底部内面は丁寧にナデ調整が施されており、凹凸がほとんど無い。体部外面に水分を多量に含んだ粘土の垂れた痕が残っている。19は1区から出土した南比企産の須恵器長頸瓶の底部周辺の破片である。体部下位にヘラ削り調整が及ぶ。底部外面の一部に煤か墨液の乾燥した物が付着している。付着物は黒く光沢があり、ピンセット等で引掻けば、器から剥離する。また、底部外面には、焼成前に書かれた文字が有ると思われるが、筆圧が弱く判別ができない。20は2区から出土した東金子産の須恵器壺の底部破片である。底部は全面回転ヘラ削りが施されており、体部との接合点が断面から観察できる。また、接合の際にナデ付けた痕も底部内面外周に確認

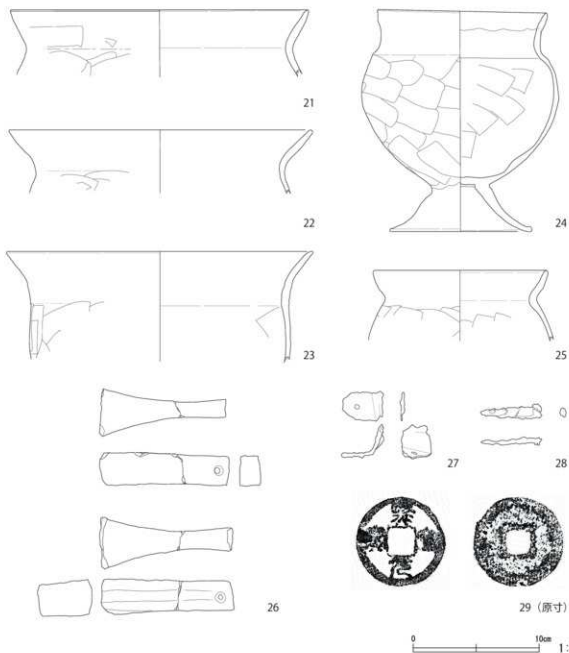


第5图 第1号住居跡 出土遺物(1)



第6図 第1号住居跡 出土遺物(2)

できる。21は4区から出土した土師器甕の口縁部から頸部にかけての破片である。細かいヘラ削り痕が有る。「く」字状口縁部を持つ。22は3区から出土した土師器甕の破片で、「く」字状口縁部を持つ。内面の一部に煤の付着が確認できる。23は1・2区から出土した、土師器甕の破片で、体部がほぼ直立す



第7図 第1号住居跡 出土遺物(3)

る形になるため、恐らく口縁径が最大径となる。24はカマド内から出土したほぼ完形の土師器台付甕で、若干歪みがある。口縁部は直立気味に作られ、内面に途中で継ぎ足して延ばした痕が有る。外面は丁寧にナデ付けられているため、接合痕は看取できない。台部と体部の接合は、細い丸棒状の接面を持つ工具でナデ付けられている痕が有る。25は2区から出土した土師器台付甕である。金雲母のような含有物が胎土に看取できる。口縁部外面は滑らかにナデ調整され、凹凸がほとんど無い。断面形は「く」字状を呈する。26は琵琶撥型の砥石で、穿孔されている。開口部に揺鉢状の擦痕があり、紐を通していたものと考えられる。湾曲した面的一方に、刀子の研磨に使用されたものと考えられる、幅0.5～0.8cmの擦痕を伴う凹みがある。27は用途不明の鉄製品で、穿孔された片側半円形の板状のものである。作成時には意図していなかったと考えられる斜めの折りが有る。現在は全面錆に覆われている。28も用途不明の鉄製

品である。本体と考えられる部分は、「S」字状に曲がった金属板であることから、刀子の切先と考えられる。「S」字状に曲がった後に錆が発生し、現在は全面これに覆われている。29は銅製の錢貨「熙寧元寶」で北宋時代のものである。字句は篆書体、裏は無地である。

溝跡

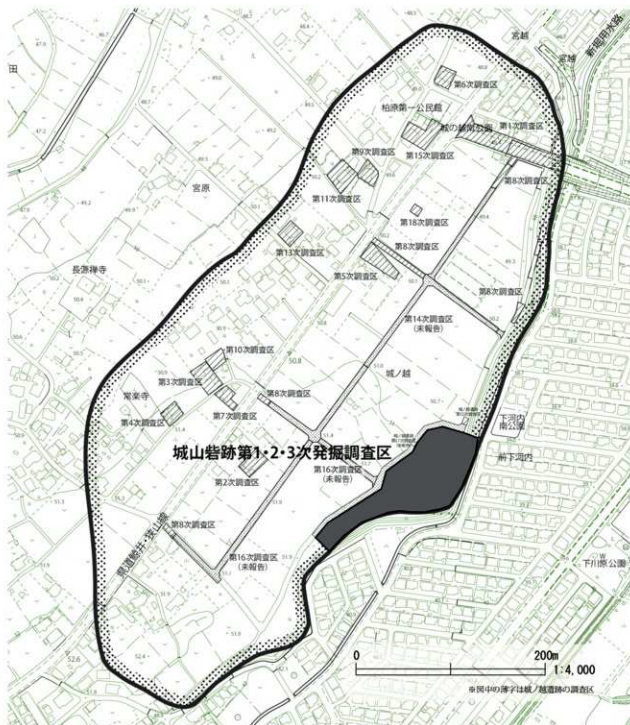
第1号溝跡

第1号住居跡の北東に位置し、住居跡が埋没した後に掘削されたと考えられる。小規模なピットが多数重複するが、この溝に付随するものでは無い。出土遺物は無く、遺構の詳しい時代は不明である。

IV 城山砦跡第1・2・3次調査

1 遺跡の概要

城山砦跡は埼玉県狭山市柏原に所在し、西武新宿線狭山市駅より北へ、直線距離にして3km付近に位置する。遺跡より北西100mに県道鯉井狭山線が走る。遺跡の周辺は農業振興区域で、野菜畑や麦畑の田園風景が広がる。分布調査および現存する遺構から推定される遺跡範囲は80×70mで、城ノ越遺跡範



第8図 城山砦跡第1・2・3次調査区位置図

囲と重複する。遺跡東側は段丘崖で、標高はおよそ 50 m、下位面との比高差は約 12 m を測る。

本遺跡を包括する城ノ越遺跡は、狹山市教育委員会および狹山市遺跡調査会によって 17 回調査が実施されている。検出された遺構は、奈良・平安時代のものが多数を占め、中世の遺構は特に検出されていない。南西にやや離れて位置する英遺跡からは、中世堀跡が検出され、内耳竈及びカワラケが出土している。

2 発掘調査の経過

第 1 次発掘調査は、平成 18 年 6 月 13 日から平成 19 年 2 月 7 日にかけて本曲輪部分および枳形状張出北西部分の堀を対象に実施した。

平成 18 年 6 月 13 日（火曜日）～6 月 19 日（月曜日）機材等の事前準備。

6 月 20 日（火曜日）機材搬入。本調査開始。第 1～3 号トレンチのプランを設定。杭打ち。

6 月 21 日（水曜日）～23 日（金曜日）本曲輪（第 1・2 号トレンチ）の調査を開始。調査区の壁を清掃、遺構確認終了。硬化面および土塁の崩落痕を確認。

6 月 27 日（火曜日）～29 日（木曜日）第 1・2 号トレンチの写真撮影をし、セクション図を作成。

6 月 29 日（木曜日）～7 月 14 日（金曜日）堀（第 3 号トレンチ）調査開始。

7 月 25 日（火曜日）第 3 号トレンチの重機による掘削開始。

7 月 26 日（水曜日）～8 月 1 日（火曜日）第 3 号トレンチの人力掘削開始。遺構の掘り下げ終了。

堀底検出。写真撮影。

8 月 7 日（月曜日）第 1・2 号トレンチの平面図を作成、埋め戻し。

8 月 18 日（金曜日）第 3 号トレンチの平面図および断面図作成。

8 月 21 日（月曜日）機材撤収。

9 月 7 日（木曜日）第 3 号トレンチ埋め戻し。

平成 19 年 2 月 5 日（月曜日）本曲輪北側の内堀（第 4 号トレンチ）部分の重機および人力による掘削開始。

2 月 6 日（火曜日）第 4 号トレンチ掘削完了、写真撮影、平面図・セクション図作成。

2 月 7 日（水曜日）第 4 号トレンチ埋め戻し。

第 2 次発掘調査は、平成 19 年 3 月 14 日から平成 19 年 3 月 16 日にかけて本曲輪（グリッド）部分、本曲輪北側の内堀（第 4 号トレンチ）部分、二ノ曲輪西側の堀（第 5 号トレンチ）部分、伝三ノ曲輪部分（第 6～8 号トレンチ）を対象に実施した。

3 月 14 日（水曜日）二ノ曲輪西側の堀（第 5 号トレンチ）部分の重機および人力による掘削開始。

3 月 15 日（木曜日）遺構の掘り下げ終了。堀底検出。写真撮影し、平面図・セクション図を作成。

3 月 16 日（金曜日）伝三ノ曲輪（第 6～8 号トレンチ）部分掘削。写真撮影し、平面図を作成。埋め戻し。

第 3 次発掘調査は、平成 23 年 2 月 14 日から平成 23 年 2 月 28 日にかけて本曲輪虎口及び堀の一部を対象に実施した。

平成 23 年 2 月 14 日（月曜日）機材等の事前準備。

2 月 17 日（木曜日）虎口、内堀に調査区を設定。人力掘削開始。

2 月 22 日（火曜日）調査区を清掃し、写真撮影。平面図を作成。

2 月 24 日（木曜日）人力での埋め戻しを行う。

2 月 28 日（月曜日）機材等を撤収し、現地調査終了。

3 検出遺構と出土遺物

第1次調査では、第1～4号トレンチを設定し、調査した。奈良・平安時代の竪穴住居跡の床面と考えられる硬化面1箇所、時代不明の硬化面1箇所、中世の堀底が検出された。

第2次調査では、第5～8号トレンチを設定し、調査した。中世の堀底と版築工法による土塁修復跡、および時代不明堀状遺構の底部が検出された。

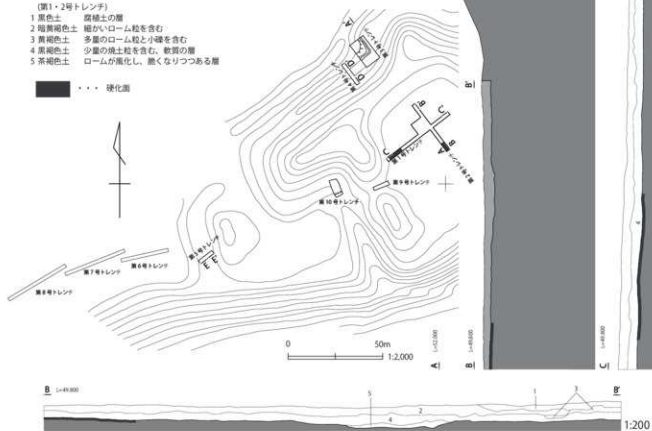
第3次調査では、第9・10トレンチを設定し、調査した。内堀の法面の一部と虎口部分の硬化面が検出された。第1次調査の結果から、堀底は深いことが想定されるため、法面の確認のみにとどめた。

第1号トレンチは、本曲輪の北側枡形付近を始点とし、北西から南東にかけて、直線状に設定した。南東端から、奈良・平安時代の竪穴住居跡の床面と考えられる硬化面が検出された。現地表面より0.40m程の深さを測り、黒土からロームへの遷移層が堆積していた。

(第1・2号トレンチ)

- 1 黒色土 腐植土の層
- 2 暗黄褐色土 細かいローム粒を含む
- 3 黄褐色土 多量のローム粒と小礫を含む
- 4 栗褐色土 少量の焼土粒を含む、軟質の層
- 5 茶褐色土 ロームが風化し、濃くなりつつある層

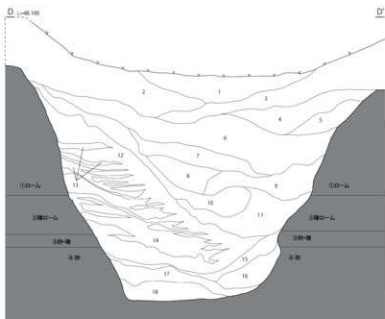
■・・・硬化面



第9図 城山砦跡第1・2・3次調査区全測図

床面の周辺から8世紀後半と考えられる須恵器環・須恵器長頸瓶等が出土した。床面直上の出土ではないため、遺物がこの遺構に伴うものかは不明である。1は東金子産の須恵器環である。底部は周辺部を回転ヘラ削り調整されている。底部外面に「合」字が墨書されている。2は南比企産の須恵器環である。底部は無調整。内底部は非常に滑らかに仕上げられている。粉状の酸化鉄が体部の所々に付着している。胎土に含まれていた鉄分か。3は東金子産須恵器環である。底部は全面回転ヘラ削り調整されている。4は土師質の土器片で、甕の体部下部和考えられる。外面の削り痕は明瞭である。内面には煤が付着している。

第2号トレンチは、本曲輪虎口のやや北寄りの部分を始点とし、第1号トレンチに直交する形で設定した。南西端虎口付近で、時代は不明であるが硬化面を検出した。土塁が崩落した土の層より8cm程深い位置に広がっていた。遺物は出土しなかった。

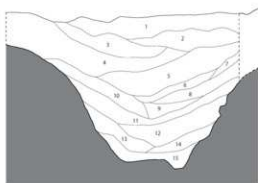


(本曲輪堀)

- 1 表土 ロームを多量に含む。
- 2 茶褐色土 やや灰色。ローム粒・焼土粒・炭化物を少量含む。
- 3 // ローム粒が第2層より多く、多量の礫を含む。外土層崩落土か。
- 4 // ロームブロックを多く含む。上層の礫はほとんど含まない。
- 5 // 第3層と同様。礫を多く含む。ローム粒も含む。
- 6 // 緻密。多量のローム粒・ブロックを含む。少量の礫が混入する。
- 7 黒褐色土 緻密でやや粘質。ローム粒・ブロックを多く含む。
- 8 暗茶褐色土 黒色土とロームブロックの混合層。固くしまっており、粘性も高い。火山灰様の灰色土を上層との間に含む。

- 9 黒褐色土 第7層に類似するが、ロームを第7層より多く含む。焼土も若干含む。
- 10 黄褐色土 硬質。わずかに黒色土を含むが、ロームを主体とする。
- 11 暗黄褐色土 第8層に類似するが、ローム含有は第8層より少ない。焼土を若干含む。
- 12 黒色土 硬質。単一の黒色土層。
- 13 暗茶褐色土 第12層と第14層の混合層。やや黄色が強い。
- 14 暗黄褐色土 ローム粒・ブロック主体の層。黒色土も若干含む。
- 15 黒褐色土 砂礫が多い。ローム粒・ブロックを含む。粘性が高い。ド状の土質。
- 16 暗茶褐色土 ローム粒・ブロック、砂礫の混合層。非常に粘く。外壁の砂を含む。
- 17 // 第15層と第16層が交互に入り混じるような層。
- 18 // ローム粒・ブロックを主体とする。外壁が崩落した礫を含む。

E 1=40.700



(二ノ曲輪堀)

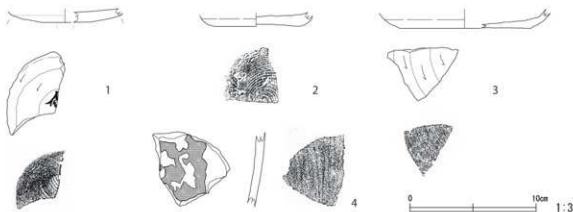
- 1 表土 腐植土の層。
- 2 茶褐色土 緻密。ローム粒を含まない。
- 3 // 緻密。ローム粒を少量含むが、腐植土が混入する。
- 4 // 緻密。ローム粒を少量含むが、第3層より硬質。
- 5 暗茶褐色土 緻密。ロームブロックを多く含む。後世の崩落土か。
- 6 黒褐色土 緻密。黄色が最も強く、ローム粒をほとんど含まない。
- 7 暗茶褐色土 ローム主体の層で硬質。第6層が増積する前に崩落した層。
- 8 黒色土 やや粘く。黒色が濃い。腐植土か。ローム粒を含む。
- 9 黒褐色土 脆い。第8層よりローム粒が多く、粒子が粗い。崩落土。
- 10 暗茶褐色土 やや脆い。第9層よりローム粒が多い。外側からの崩落土。
- 11 暗黄褐色土 ローム粒が主体で脆い。内外からの崩落土。一気に崩落したものか。
- 12 // 内側からの崩落土。ロームブロック主体。粗いローム粒子が混入。
- 13 暗茶褐色土 外側からの崩落土。ローム粒が主体。ごく微量の有機物を含む。
- 14 // 内側からの崩落土と有機物の混合層。土塁最上層の崩落土か。
- 15 // ローム粒・ブロックのみの層。壁の崩落時に流し積石土か。

0 2m 1:60

第10図 本曲輪北内堀・二ノ曲輪西堀土層図

第1号トレンチ 出土遺物観察表

No.	器 種	口径	底径	内底径	器高	残存率	胎 土	焼成	色調	特 徴	産地
1	須恵器坏	-	(9.1)	-	-	20%	白色粘土	普通	浅黄	周辺同軸へつ削り。帯部「合」か?	東金子
2	須恵器坏	-	(10.4)	-	-	10%	白色針状・白色粘土	良好	灰	全面同軸へつ削り。	陶比企
3	須恵器坏	-	(6.4)	(7.6)	-	10%	白色粘土	良好	灰	底部無調整。鉄分付着。	東金子
4	土師質土器	-	-	-	-	5%	雲母・石英・長石	普通	明赤褐	内面に塗付着。外面に細かい削り痕有り。	-



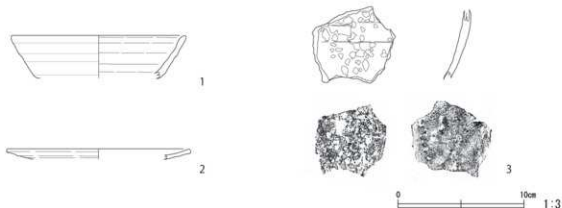
第11図 第1号トレンチ 出土遺物

第3・4号トレンチは、本曲輪北側の内堀に設定した。中世の堀底を検出した。現存する堀底面より3.50m深い部分にあり、最下層に崩落した礫層、その上にローム混じりの礫層が堆積している。第12～14層は同じ土質の層が薄く幾重にも重なっている。版築工法による土塁と堀の壁の崩落防止のための構造と考えられる。

堀の堆積土からは、奈良・平安時代の須恵器坏、灰釉陶器の皿と中世の内耳鍋の破片と思われる土器片が出土した。1は東金子産の須恵器坏である。体部外面に見られるロクロ目は明瞭である。2は灰釉陶器

第3・4号トレンチ 出土遺物観察表

No.	器 種	口径	底径	内底径	器高	残存率	胎 土	焼成	色調	特 徴	産地
1	須恵器坏	(13.8)	-	-	-	10%	黒色粘土・白色粘土	良好	灰	破片。黒色粘土を多く含む。ロクロ目顕著。	東金子
2	灰釉陶器皿	(14.4)	-	-	-	10%	黒色粘土	良好	灰白	口縁部外面が面取りされている。薄茶色の釉。	-
3	内耳鍋	-	-	-	-	5%	長石・雲母・礫(チャート)	良好	明橙	外面二次焼成のため黒化色。内面細かい割罫。	-



第12図 第3・4号トレンチ 出土遺物

の皿である。口縁部外面は面取り整形されている。釉の色は薄茶色である。

第5号トレンチは、二ノ曲輪西側の堀に設定した。時代不明の堀状遺構の底を確認した。現存する浅い窪みより2.46m深い部分にあり、自然堆積が確認できた。本曲輪北側の内堀のような版築工法による工事跡は確認できなかった。東側には稲荷社があり、調査区の拡張はできなかった。遺物は出土しなかった。

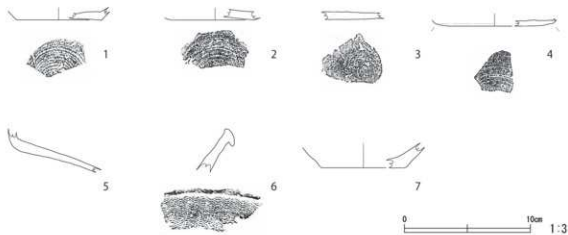
第6～8号トレンチは、伝三ノ曲輪部分に設定し、調査した。地表面より40cmの深さでローム面が検出された。遺構・遺物は検出されなかった。

第9号トレンチは、本曲輪虎口に設定した。現地表面から20cmの深さで砂利敷きの面を確認した。遺物として、第12図7に示したカワラケの破片が出土した。小破片であり、詳細は不明である。

第10号トレンチは、本曲輪虎口付近の内堀に設定した。確認した内堀の法面はロームの単一層で、砂利や礫は混入していなかった。断面からは土橋の存在を確認することはできなかった。堆積土から、須恵器環・蓋・壺・長頸瓶、土師器甕の破片が出土した。いずれも混入した遺物と考えられる。1・2・5が東金子産、3・4・6が南比企産の須恵器である。

第10号トレンチ 出土遺物観察表

No.	器種	口径	底径	内底径	器高	残存率	胎土	焼成	色調	特徴	産地
1	須恵器環	-	φ6.0	φ6.8	-	10%	小礫	良好	浅黄	底部無調整。内底部に黒色の染み有。	東金子
2	須恵器環	-	φ5.0	φ5.0	-	10%	白色粒、小礫	良好	黄褐色	底部無調整。	東金子
3	須恵器環	-	-	-	-	5%	白色針状	良好	灰	全面調整ヘラ。	南比企
4	須恵器環	-	φ9.2	φ9.0	-	5%	白色針状、小礫	良好	灰白	全面調整ヘラ。爪先技法有。	南比企
5	須恵器短頸瓶	-	-	-	-	10%	白・黒色粒、小礫	良好	灰	薄手で、最薄4mm。外面に輪が飛んだ痕有。	東金子
6	須恵器長頸瓶	-	-	-	-	5%	白色針状、白色粒、小礫	良好	灰	口縁直下に青黄波紋有。	南比企
7	カワラケ	-	φ6.0	-	-	5%	黒色粒	良好	橙	粉粒になりやすく、磨耗が著しい。	-



第13図 第10号トレンチ 出土遺物

V 結語

坂上遺跡第1号住居跡について

遺物観察の結果、坂上遺跡第1号住居跡は、8世紀中頃に成立していることがわかった。しかし、本調査が坂上遺跡では初めての調査であり、いわば点として検出された第1号住居跡の帰属が不明であるため、これについて検討したい。

検討するに当たり、特に注目した出土遺物は、刻書土器である。当該須恵器坏は、8世紀中頃の東金子窯で作られたものである。

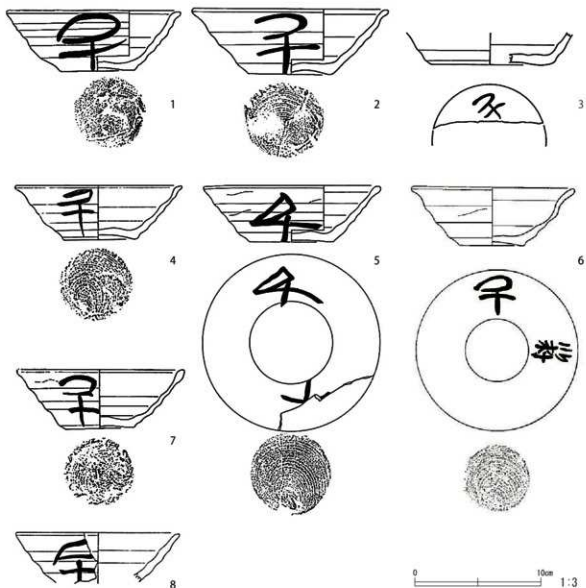
刻書土器は、末木啓介氏の論考により、須恵器の生産現場で供給先を示すために記したことが明らかにされている。末木氏は、刻書を記号と文字とに分け、記号は生産現場内で意味が完結するもので、生産数を計測する等の用途があったとし、文字は生産現場以外でも利用されるもので、運搬の際の供給先の仕分けなどの用途であったとしている〔末木1998〕。

本調査で出土した刻書土器「子」は、字形や用筆法は整っており、文字として記入されていると見ていただろう。坂上遺跡第1号住居跡は、「子」を標識とする集団に属し、須恵器の供給を受けたと考えられるのである。つまり、共存する遺物の年代間と併せて検討すると、8世紀中頃の前半段階で、「子」を標識とする集団が成立していたと考えられるのである。

ところで、坂上遺跡の南東に位置する、揚榑木遺跡の9世紀の間に存在した複数の住居跡から、「子」に非常によく似た形の記号「𠄎」が書かれた墨書土器が出土している。仲山英樹氏は、これを「土器ないしそれを使用する人間が有る集団に帰属することを明示」した墨書と捉え、揚榑木遺跡の集団標識であるとの見解を示している〔仲山1988〕。私見では、この仲山氏が示した集団標識としての記号の有効範囲は、一定の共通意識を持つ集団内で完結するとした、末木氏の刻書土器の記号の有効範囲と同じものと捉えている。刻書が墨書になり、記号の有効な場所が、生産現場から集落になっても、記号としての利用が、記入された現場でのみ通用するという点で、なんら変わらないからである。

さて、仲山氏の見解を支持しつつ、揚榑木遺跡の墨書の細かい点を観察すると、出土した八つの「𠄎」記号は、形は統一されているが、「𠄎」の頭部「コ」の二画目の開始点が統一されていないことがわかる。これは、筆記者が形を似せることに重点を置き、用筆法は気にしていないことから発生した現象と考えられる。つまり、「𠄎」には原形となる字が有るものの、9世紀初頭段階では既に記号化され、本来の字形を継承していないのである。したがって、原形の文字は、8世紀代の遺物に書かれていた可能性が高く、その最たる候補が、本調査で出土した刻書土器「子」と考えられるのである。

以上のことから、坂上遺跡第1号住居跡は、揚榑木遺跡と同じ集団に属し、その北端に当たる住居であると評価したい。



1・2 揚植木遺跡第5号住居跡 3同12号住居跡 4同51号住居跡 5・6同59号住居跡 7・8同74号住居跡

第14図 揚植木遺跡出土墨書土器「子」

参考文献

狭山市遺跡調査会 1986 『揚植木遺跡』

狭山市教育委員会 1987 『今宿遺跡』

狭山市史編纂委員会 1986 『狭山市史』原始古代編

末木啓介 1998 「集落出土のヘラ記号からみる須恵器の生産と流通」『研究紀要』14 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

仲山英樹 1988 「古代集落遺跡出土の墨書土器—埼玉県揚植木遺跡の検討—」『玉口時雄先生古希記念論文集 古代集落の諸問題』

写 真 图 版



坂上遺跡第1次調査調査区全景



坂上遺跡 小学生対象の見学会の様子



坂上遺跡 第1号住居跡全景



坂上遺跡 第1号住居跡遺物出土状況



坂上遺跡 第1号住居跡カマド全景



坂上遺跡 第1号住居跡カマド遺物出土状況



第1号住居跡出土遺物 (1)



第1号住居跡出土遺物 (2)



第1号住居跡出土遺物 (3)



第1号住居跡出土遺物 (4)



第1号住居跡出土遺物 (5)



第1号住居跡出土遺物 (6)



第1号住居跡出土遺物 (7)



第1号住居跡出土遺物 (7) 刻書拡大



第1号住居跡出土遺物 (8)



第1号住居跡出土遺物 (9)



第1号住居跡出土遺物 (10)



第1号住居跡出土遺物 (11)



第1号住居跡出土遺物 (12)



第1号住居跡出土遺物 (13)



第1号住居跡出土遺物 (14)



第1号住居跡出土遺物 (15)



第1号住居跡出土遺物(16)



第1号住居跡出土遺物(17)



第1号住居跡出土遺物(18)



第1号住居跡出土遺物(19)



第1号住居跡出土遺物(20)



第1号住居跡出土遺物(21)



第1号住居跡出土遺物(22)



第1号住居跡出土遺物(23)



第1号住居跡出土遺物 (24)



第1号住居跡出土遺物 (25)



第1号住居跡出土遺物 (26-1)



第1号住居跡出土遺物 (26-2)



第1号住居跡出土遺物 (27)



第1号住居跡出土遺物 (28-1)



第1号住居跡出土遺物 (28-2)



第1号住居跡出土遺物 (29)



城山砦跡第1次調査 第1・2号トレンチ



城山砦跡第1次調査 第4号トレンチ外土塁側



城山砦跡第1次調査 第4号トレンチ内土塁側



城山砦跡第2次調査 第5号トレンチ



城山砦跡第2次調査 第6・7号トレンチ



城山砦跡3次調査 第9号トレンチ



城山砦跡3次調査 第10号トレンチ南側から



城山砦跡3次調査 第10号トレンチ北側から



第1号トレンチ出土遺物(1)



第1号トレンチ出土遺物(2)



第1号トレンチ出土遺物(3)



第1号トレンチ出土遺物(4-1)



第1号トレンチ出土遺物(4-2)



第3・4号トレンチ出土遺物(1)



第3・4号トレンチ出土遺物(2)



第3・4号トレンチ出土遺物(3-1)



第3・4号トレンチ出土遺物 (3-2)



第10号トレンチ出土遺物 (1)



第10号トレンチ出土遺物 (2)



第10号トレンチ出土遺物 (3)



第10号トレンチ出土遺物 (4)



第10号トレンチ出土遺物 (5)



第10号トレンチ出土遺物 (6)



第10号トレンチ出土遺物 (7)

報告書抄録

ふりがな	さかういせきだいいじちようざ／しろやまとりであとだいい・2・3じちようざ							
書名	坂上遺跡第1次調査／城山砦跡 第1・2・3次調査							
副書名	個人専用住宅建設・学術研究に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	狭山市文化財調査報告第32集							
シリーズ名	狭山市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	20							
著者氏名	三ツ木康介・安井智幸							
編集機関	埼玉県狭山市教育委員会							
所在地	〒350-1380 埼玉県狭山市入間川1丁目23番5号 電話 04-2953-1111							
発行年月日	西暦2014(平成26)年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
坂上遺跡	埼玉県狭山市大字下奥富 字坂上492-1	22	30	139° 25'43"	35° 52'37"	2011.2.25～ 2011.3.18	100	記録保存調査
城山砦跡	埼玉県狭山市柏原 字城ノ越2346-2	22	30	139° 24'39"	35° 53'04"	2006.6.13～ 2007.2.7	3,489	学術研究
	埼玉県狭山市柏原 字城ノ越2376	22	30	139° 24'38"	35° 53'03"	2007.3.14～ 2007.3.16	1,391	学術研究
	埼玉県狭山市柏原 字城ノ越2346-2	22	30	139° 24'39"	35° 53'04"	2011.2.14～ 2011.2.28	3,489	保存目的調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
坂上遺跡 第1次調査	集落跡	奈良・平安時代	住居跡	1軒	須恵器・土師器	刻書土器「子」		
		時代不明	溝跡	1条	鉄製品・銭貨			
城山砦跡 第1次調査	城館跡	中世	堀跡	1条	須恵器・内耳鍋			
城山砦跡 第2次調査	城館跡	中世	堀跡	2条	須恵器・不明土器	版築跡		
城山砦跡 第3次調査	城館跡	中世	堀跡	1条	須恵器・カワラケ			
			虎口硬化面	1箇所				

狭山市文化財報告 第32集
狭山市埋蔵文化財調査報告書第20集
坂上遺跡第1次調査／城山砦跡1・2・3次調査
個人住宅建設・学術研究に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成26年2月28日 印刷

平成26年3月31日 発行

発行 埼玉県狭山市教育委員会

埼玉県狭山市入間川1丁目23番5号

電話 04-2953-1111

印刷 株式会社文化新聞社

【正誤表】

坂上遺跡第1次調査／城山砦跡第1・2・3次調査
 (狭山市文化財調査報告 第32集)

ページ	行	誤	正
5ページ	11 上広瀬上ノ原遺跡	22005	22007
	48 上中原遺跡	22025	22039
	49 中原遺跡	22025	22038
報告書抄録	坂上遺跡 北緯	139°25'43"	35°52'37"
	坂上遺跡 東経	35°52'37"	139°25'43"
	城山砦跡1次 北緯	139°24'39"	35°53'04"
	城山砦跡1次 東経	35°53'04"	139°24'39"
	城山砦跡2次 北緯	139°24'38"	35°53'03"
	城山砦跡2次 東経	35°53'03"	139°24'38"
	城山砦跡3次 北緯	139°24'39"	35°53'04"
	城山砦跡3次 東経	35°53'04"	139°24'39"